

第1回すわ大昔サロンW!
2023.7.5<諏訪市博物館>

諏訪神党「大妻氏」の謎！



(一社)大昔調査会
高見俊樹

目次

- 〇 プロローグ <自己紹介>
- 〇 大妻女子大学(大妻学院)
- 〇 諏訪神社と諏訪氏
- 〇 諏訪神党と大妻氏
- 〇 大妻氏居館跡と大妻神社
- 〇 大妻学院と諏方家の交流
- 〇 大妻の「ちから」

『創立者の生涯と学院のあゆみ』

コタカ先生が「最愛の夫」と語られた、大妻良馬先生は、明治4年、高知県高岡郡戸波村永野に、代々医を業とする大妻家の三男として誕生された。

伝えによれば先祖は諏訪神家の一党で、長野県南安曇郡倭村大妻の地に居館を構え、大妻氏となった。承久の乱に出陣して破れ、その一流が土佐に土着し医を業とする豪士となったという。

勉強が嫌いで、畑仕事に打ち込んでいた良馬少年は、18才の夏、学問の必要を痛感し、夜学に通い猛勉強を始められた。20才で志願し、広島工兵隊に入隊。日清戦争に従軍、叙勲された。



大妻良馬先生 (21歳) 明治25年

『創立者の生涯と学院のあゆみ』

良馬先生の母君

故人(良馬先生)の母人は門閥の娘で相当の教養があり、特に児女の教育については一眼識を具へ、躰の如きは寧ろ厳に過ぎる位であった。故人が母人を偲びて「己の思想は大半母の賜物だ」とて、露をうるませて感激に耽ったことがよくあった。

4人(兄弟)の腕白時代、特に長兄の如きは随分乱暴であったらしいが、母人は時折二尺の物指でその腰部を鞭ち、その一撃毎に「恥を知れ」と言った。この言は大妻家の家訓で、故校主が之を大妻学校の校訓に選定したのである。

母人は反面頗る情愛の人で、真に良妻たり賢母であったものと見える。

(『大妻良馬追悼録』青年時代 武内貞義氏の文章より)

大妻コタカ・良馬の略歴 (明治～大正期)

| 大妻コタカ (旧姓:熊田) | 大妻良馬 |
|--------------------------------------|-------------------|
| M17 広島県世羅郡三川村生まれ | M4 高知県高岡郡戸波村生まれ |
| M33 裁縫教習所(甲山高女)卒業 | M28 日清戦争従軍の功で受章 |
| M37 東京和洋裁縫専門女学院卒 | M39 日露戦争従軍の功で受章退役 |
| M40 鎌倉尋常高等小学校訓導 | M40 熊田コタカと結婚 |
| M41 麴町に裁縫・手芸の家塾開く | M42 山階宮臨時営繕係、官舎に |
| M43 山階宮の許可で「東京女子技芸伝習所」を開く | |
| T3 山階宮家の広い官舎に「大妻技芸伝習所」を開校 | |
| T6 「私立大妻技芸学校」に変更。校長:大妻コタカ、校訓「恥を知れ」 | |
| T10～11 「大妻技芸学校」「大妻高等女学校」、良馬宮内庁を辞し校主に | |



諏訪の神をまつる「神官」 が武士・領主へ

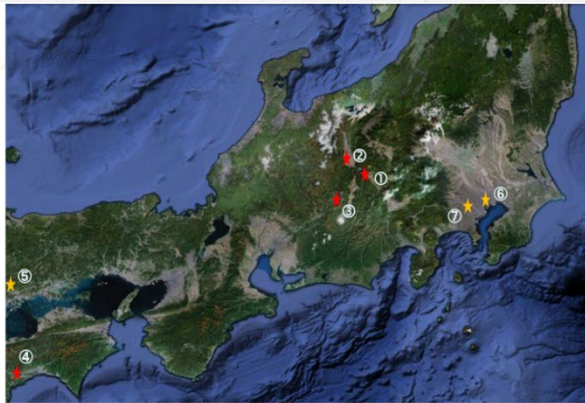


- 諏訪の地に、古くから神社の元になるような信仰や地域のまとまりがあった。持統天皇5年(691)に、天皇が使いを出して「須羽(すわ)の神」をまつる。
- 平安時代には、神官が「諏訪氏」を名乗り、武士化。
- 鎌倉時代には、上社と下社が完全に分かれる。
- 上社の「大祝(おおほうり)」は、生き神。大祝を退位後に武士になる慣わし。室町時代から上社と下社の争い、上社大祝家と惣領家の内紛も。
- 上社惣領家が争いに勝ち、大祝と領主は同じ系統になる。
- 戦国時代の諏訪氏(領主)が、江戸時代の諏訪「高島藩」の藩主につながる。

「大妻」と諏訪の位置関係

関係地図

- ① 大祝「諏方氏」
- ② 安曇「大妻氏」
- ③ 木曾「大妻氏」
- ④ 土佐「大妻氏」
- ⑤ 世羅「熊田氏」
- ⑥ 大妻女子大学
- ⑦ 同多摩キャンパス



諏訪明神の武士団

神氏一族の歴史と文化

諏訪明神の武士団

鎌倉後期、諏訪大祝の権威は北条得宗の専制とともに高まった。多くの氏族は、諏訪明神を信仰し、諏訪氏との疑似的な血縁関係を創出するようになった。治承の内乱では、平氏を称していた笠原氏は一三世紀後半に神氏を称し、海野・祿津・望月など滋野一族も一四世紀には神氏を名乗るようになった。信越国境を守る市河氏も、甲斐源氏であるにもかかわらず神氏を称するようになる。こうして鎌倉末期に形成された諏訪明神の武士団は、明神の現人神と信じられた諏訪大祝を中心に、多くの氏族を取り込んだ。その様子は室町時代につくられた神氏系図にみることができ、信濃において宗教上のみならず政治的にも軍事的にも大きな力をもつことになった諏訪武士団の動向は、信濃や東国の政治情勢を左右することになった。中先代の乱、観応の擾乱、宗良親王の抵抗などはその典型的な事例である。信濃守護小笠原氏の最大のライバルが諏訪の武士団であり、小笠原氏の領国支配が安定しなかったのは、諏訪武士団が反小笠原の立場にあったためである。

長野県立歴史館1998企画展「諏訪信仰の祭りと文化」図録より

神家一党33氏

- 以下の氏族は諏訪氏の一族であるという。
- 南北朝時代は宗家の諏訪氏ともども南朝方となる。
- 関屋氏、深澤氏、皆野氏、三塚氏、四宮氏、若尾氏、不覚氏、保科氏、神野氏、笠原氏、千野氏、松島氏、座光寺氏、栗原氏、上原氏、栗林氏、矢崎氏、風間氏、平島氏、平方氏、栗澤氏、遠山氏、向山氏、中村氏、西保氏、真志野氏、真野氏、脇間氏、繭屋氏、**大妻氏**、小島氏、中野氏、根津氏、浦野氏、大垣氏、有賀氏、平井氏、神田氏、神内氏、知久氏、桓原氏、宮所氏、宮川氏、小坂氏、安倍氏、元澤氏、高遠氏、原氏、櫻澤氏

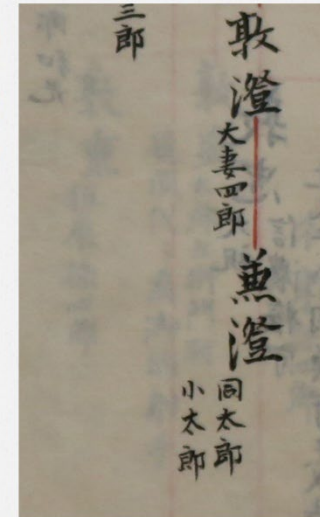
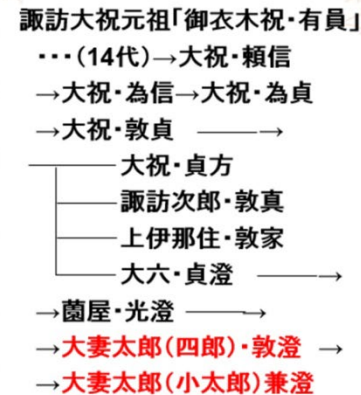
その他の諏訪氏一族

- 岡屋氏、栗田氏、三輪氏、箕輪氏、埴原田氏、一瀬氏、武井氏、安宿氏、足羽氏、桑原氏、山井氏、花岡氏、関氏、大平氏、大島氏、小野氏、小林氏、平林氏、周防氏、片倉氏、藤森氏、原氏、矢澤氏、宮下氏、宮崎氏、金山氏、津波木氏、岩波氏、高木氏、横田氏、海口氏、西條氏、櫻井氏、栗澤氏、福島氏、春日氏、大藍氏、宮坂氏、小田切氏、小井亘氏、平栗氏、早出氏、濱氏、中尾氏、波間氏、吉田氏、木村氏、大木氏、米澤氏、沖氏、杵淵氏、寺尾氏、保坂氏、諏訪部氏

大妻氏の出自（1）

- 諏訪大社の大祝を務めてきた「諏訪氏」。その血筋は「**神(じん・みわ)氏**」ともいい、祭政一致で信仰集団・武士団を率いた。
- 世襲となった上社大祝家は、「**諏方氏**」を名乗る。
- 諏訪氏は鎌倉時代には執権北条氏の得宗被官として勢力を拡大し、血族を中心に「**諏訪神党**」を形成した。大妻氏はそれに属する。
- **諏訪神党は33氏**、その他の諏訪一族は53氏か。
- 「**神氏系図**」・・・室町時代に京都諏訪氏が作成した一族の系図

諏訪氏古系図



大妻氏の出自（2）

- **大妻兼澄**（鎌倉時代の武将）
 - ・大妻氏二代「大妻太郎兼澄」は信濃南安曇郡住吉庄の荘官。
 - ・大妻郷に居館を構えていたが、承久の乱（1221）で、後鳥羽上皇側について敗戦死したとされる。
（『承久記』）
- 大妻氏のその後
 - ・大妻一族の後裔は木曾に追われた一族と、土佐に追われた一族があったとされる。

大妻氏の出自（3）

- 土佐大妻氏
 - ・土佐大妻の流れである「兼澄」十四世の子孫「利澄」の子「清澄」は長宗我部氏に仕えるも、島津合戦で豊後で討死。
 - ・「清澄」より十一代の「茂行」以後は土佐永野村の庄屋で 農業の傍ら医を営む。
→ その末裔が**大妻良馬氏**。
- （2012 花村邦昭
『忘私奉公の生涯 大妻良馬の人と思想』）

「承久の乱」

- 1221年（承久3）、後鳥羽上皇らが鎌倉幕府打倒の兵を挙げ、執権北条義時を中心とする幕府軍に鎮圧された事件。
- 執権北条氏に仕える諏訪の武士団も幕府方として参戦したが、一部は京方に与した。
- 後鳥羽・土御門・順徳の三上皇は配流、上皇方の公家・武士の所領は没収され、新補地頭の設置、六波羅探題の設置など幕府の権力は西国でも強化され、公家勢力の権威は著しく失墜した。

「承久記」（大妻兼澄の活躍①）

- 京方に属した諏訪一族の武士に**大妻兼澄**がいた。大妻氏は住吉荘に勢力を持った武士で、住吉荘が院の所有する荘園であったことから後鳥羽上皇の軍に従ったといわれている。
- 京方軍と幕府軍は木曾川を巡って最初の大衝突を起こす。このうち東山道軍は大炊渡しに集結した。
- このとき先陣をきって川を渡ったのが、甲斐の武田氏に仕がっていた千野六郎と河上左近であった。これに対したのが**大妻兼澄**であった。

『諏訪市史』上巻より

「承久記」 (大妻兼澄の活躍②)

- 千野六郎と河上左近の名乗りにたいして兼澄は「本当に千野六郎ならば一門である。六郎は諏訪大明神に免じて命は取らない。河上殿の命は申し受けよう。」といて河上左近を射落とした。一方さらに進む千野六郎に対しては、「馬を申し受けよう。」といて馬を射た。
- 幕府方の先陣の撃退に活躍した大妻兼澄であったが、続々と川を渡ってくる幕府軍を防ぎきることはできなかった。痛手を負った兼澄は山へ入って自害しようとしたという。
- しかし兼澄が自害したのかどうか分からない。

『諏訪市史』上巻より

信州における大妻氏の足跡 (1)

- 大妻神社
 - ・所在 : 長野県松本市梓川倭 南大妻
 - ・祭神 : 建御名方命(諏訪神社の祭神)、「大妻兼澄」
 - ・創立 : 創立年、兼澄合祀年、ともに不詳
 - ・社殿 : 本殿、拝殿、神楽殿
 - ・現社殿は、宝暦年間の再建
- 大妻コタカ氏の杉植樹・・・昭和39年

(拝殿改築記念として)

<2016 真家和生・成瀬麻子「大妻神社と大妻太郎兼澄」

(『人間生活文化研究』№26)>

信州における大妻氏の足跡 (2)

- 大妻郷・大妻氏居館跡
 - ・所在 : 長野県松本市梓川倭 (北大妻・南大妻・上大妻・下大妻)
 - ・遺構 : ほぼ失われ「史跡」を示す石碑(昭和12年 長野県建立)が残る。
 - ・字名 : 堀屋敷、馬場、政所、井田 鍛冶田、番匠田、神田、屋敷添 等
- <2000 小穴芳実「大妻館跡」(『信濃中世の館跡』)>



研究の成果

- 2017 高垣佐和子・井上小百合
「大妻家のルーツー大妻家と大祝諏方家の
関わり 序章ー」(『ふるさと』№69)
<2017.6.25 諏訪市において予備調査>
- 2016 高垣佐和子・井上小百合
「大妻家に関する史料を読む」(『ふるさと』№68)
- 2016 真家和生・鳴瀬麻子 (大妻女子大学博物館)
「大妻神社と大妻太郎兼澄ー資料調査研究報告1ー」
(『人間生活文化研究』№26)
- 2000 小穴芳実「大妻館跡」(『信濃中世の館跡』)
- 1968 清水福市
「大妻家に関する史料」(『ふるさと』№21)

すわ大昔サロン「参考図書」一覧表(第1回)

大昔調査会 (2025.8)

| 登録番号 | 書名 | 著者 | 発行年 | 発行所(シリーズ) |
|-------|-------------------------------------|---------|------|---------------------|
| 第1回-① | 保元物語 平治物語 承久記 | 栃木孝雄 他 | 1992 | 岩波書店「新日本古典文学大系」 |
| 第1回-② | 信濃中世の館跡 | 信濃史学会 編 | 2000 | 信濃史学会研究叢書5 |
| 第1回-③ | 中世武士団 偽りの血脈 | 桃崎有一郎 | 2025 | 講談社選書メチエ825 |
| 第1回-④ | 信濃国の南北朝内乱 | 櫻井彦 | 2021 | 吉川弘文館 歴史文化ライブラリー536 |
| 第1回-⑤ | 承久の乱研究の最前線 | 細川重男 編 | 2025 | 朝日新聞出版 朝日選書1051 |
| 第1回-⑥ | 「歴史評論」2025年7月号(No.90) 鎌倉時代史研究の現在 | 歴史科学協議会 | 2025 | 歴史科学協議会 |
| 第1回-⑦ | 三番町のコタカさん 大妻コタカ伝 | 工藤美代子 | 2016 | ワック株式会社 |
| 第1回-⑧ | 教えの道をひとすじに 大妻コタカ物語 | 北見けんいち | 2012 | 学校法人大妻学院 |

2022年04月04日

「承久記」元和活字本 上 16 大炊渡軍 1/2 (武田小五郎渡河)

大炊の渡りの戦

武田五郎、子共の中に憑みたりける小五郎を招きて、「軍の習ひ、親子をも顧みず、まして、一門・他人は申すに及ばず、『一人抜け出でて前を懸け、我、高名せん』と思ふが習ひなり。『汝、小笠原の人共に知られずして抜け出でて、大炊の渡りの先陣をせよ』と思ふは如何に。」「誰もさこそ存じ候へ。」とて、一、二町抜け出で、野を踏む様にて、その勢二十騎ばかり、河の縁へぞ進みける。

武田小五郎が郎等・武藤新五郎と言ふ者あり。童名「荒武者」とぞ申しける。勝れたる水練の達者なり。是を呼んで、「大炊の渡りの瀬踏みして、敵の有様よく見よ。」とて指し遣はす。新五郎、瀬踏みしをほせて帰り来て、「瀬踏みこそつかまつりて候へ。但し、河の西方、岸高くして、たやすく馬をあつかひ難し。向かふの岸に、渡瀬七、八段が程、菱を種ゑ流し、河の中に乱株打ち、綱はえ、逆茂木引きて流し懸け、四、五段が程候ひしを、菱抜き捨てて流しぬ。綱きり、逆茂木切りて、馬の上げ所には、誌しを立てて候ふ。それを守つて渡させ給へ。」とぞ申しける。武田小五郎、先様に存知したりければ、河の縁へ進む。

武田が手の者、信濃国の住人、千野五郎・河上左近、二人打ち入りて渡しけるが、向かふの岸に、黒革威の鎧に月毛なる馬に乗りて、黒羽の矢負ひて塗籠籐の弓持ちたりけるが、河の端の下の壇に打ち下りて、「向かふの岸を渡すは何者ぞ。是は、武田小五郎殿の御手に、信濃国の住人、千野六郎・河上左近と申す者。」と名乗りければ、「同国の住人・大妻太郎兼澄なり。真に千野六郎ならば、我等一門ぞかし。六郎は諏訪大明神に免し奉る。河上殿に於いては、申し承らん。」とて、よつ引いて丁と射る。左近が引き合はせを篋深に射させて、さかさまに落ちて流れけるに、千野六郎、是にも臆せず、やがて続きで渡しければ、「千野六郎は、もとより大明神に免し奉る。馬に於いては申し受けん。」とて、よく引いて丁と射る。六郎が弓手の切付の後ろの余りを篋深に射させて、馬、さかさまに転びければ、太刀を抜きて、逆茂木の上へ飛び立つ。歩行武者六人、寄り合ひて、千野六郎は討ち取りにけり。

同じ手の者・常葉六郎、それも大妻太郎に鎧の草摺の余りを射させ、舟の中に落ちたりけるを、先の六人、寄り合ひて討ちにけり。吾妻太郎・内藤八、それも射られて流れにけり。内藤八は、真甲の外れ射させて、血、目へ流れ入りければ、後も前も見ず、馬の頭を下り様に悪く向けて、やがて巻き沈められけるが、究竟の水練なりければ、逆茂木の根に取り付きて、心を沈め思ひけるは、「是程の手にて、よも死なじ。物の具しては助からじ。この鎧、重代の物なり。命生きたらんは、その時、取るべし」と思ひて、物の具解き、上帯を以て、逆茂木の根を岩の立ち添ふたるに纏ひ付けて、向かひたる方へ這ひける程に、然るべき事にや、渡瀬より下、人もなき所にはひあがりたり。腰より上は揚がりて、後、絶え入りぬ。程経て後、生き出でたり。京方の者共、見付けたりけれども、「死人、流れ寄りたり」と思ひて、目も懸けず。その後、縁者尋ね来たりて、助けける。後に水練を入れて、河の底なる鎧を取りたりけり。

さる程に、武田小五郎、やがて打ち入りて渡しけり。伴ふ輩は誰々ぞ。兄の悪三郎・弟の六郎・同七郎・武藤五郎・新五郎・内藤七・黒河内次郎・岩崎五郎。以上九人、是等を始めとして、百騎に足らぬ勢にてぞ渡しける。京勢、放ちける矢、雨の足の如くなれば、或いは馬を射させ、或いは物の具のすきに射させて、河へ入る。是をも顧みず、乗り越え乗り越え渡しける。

(底本：「承久記」(国史研究会 1917 年刊『国史叢書 承久記』(国会図書館 D.C.))